小説に描かれた1950年代の都市と郊外の生活

——John Cheever の作品を中心に——

岩　山　太　次　郎

I

アメリカの1950年代の現象の一つに，その時代の文化現象や社会状態にたいする関心が高まり，それを分析・批判しようという傾向があったことが指摘できよう。

David Riesman が大勢は「他人指向型」(" other directedness ") の人間になってきたとか，C. Wright Mills がホワイト・カラーは画一的なものに変ってきたとか，William Whyte が「組織の中の人間」を論じたのは「豊かな社会」(" affluent society ") にあって，いわゆる「慰め」(comfort) と「適合」(conformity) を求める一般大衆の生き方に疑問を抱いたり，不安を感じたりしたからであった[1]。かれらは，社会や組織，集団の中にあっても，個人の存在は軽視されるべきではなく，人間の存在，自己の存在を問い直さなければならないと考えた。

こういう人間の存在のあり方を問い直すことは，小説の場合でも，1940年代の終りから1950年代当初にかけて登場してきた新しい作家たちによってなされはじめていた[2]。そして，これ

1) Cf. David Riesman with Nathan Glazer and Reuel Denney, *The Lonely Crowd; A study of the changing American character*, 1950: C. Wright Mills, *White Collar : The American middle classes*, 1951; William Whyte, *The Organization Man*, 1956; John K. Galbraith, *American Capitalism*, 1952.

2) 人間の存在や自己のあり方を問いなおす方法やそれへの目の向け方には様々なものがあるが，主なものとしては次のようなものがあげられよう。

a) 戦争あるいは軍隊の組織と個人の存在の関係からのもの (Norman Mailer, *The Naked and the Dead*, 1948; James Jones, *From Here to Eternity*, 1951; etc.)

b) 無垢と汚れという観点からのもの (J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*, 1951; John Updike, *Rabbit, Run*, 1960; etc. 特に，偽り，偽物に満ちた生活にたいして，なんとかして精神的には無垢なものを求めようとして，社会的には落伍者になった17才の少年 Holden Caulfield を描いた *The Catcher in the Rye* は注目すべきものである。また，Glass saga といわれる Salinger の一連の作品も，精神的無垢を求めた作品といえよう。)

c) WASP でない非主流文化圏からの問いかけ：ユダヤ系作家からのものと黒人作家からのもの (Saul Bellow は *Dangling Man* (1944) や *The Victim* (1947) ですでに個人の存在の問題を提示していたが，1953年には *The Adventures of Augie March* を出したし，1959年には *Henderson the Rain King* で，アメリカで物質的には成功をおさめていた Eugene Henderson をアフリカへ向わせる形での問いかけを行なった。また，Bernard Malamud も *The Assistant* (1957) や *Maggic Barrel* (1958) で登場するし，Philip Roth も *Goodbye, Columbus* (1958) で世に出てくる。黒人作家からの問いかけでは，Ralph Ellison の *Invisible Man* (1952) と James Baldwin の *GoTell It on the Mountain* (1953) に注目したい。)

d) 南部社会での問いかけ (William Styron, *Lie Down in Darkness* (1951); Flannery O'Conner, *Wise Blood* (1952); etc.)

e) 物質文明からの離脱の方法をさがす Beats 作家からのもの (Jack Kerouac, *On the Road* (1957);

らの作家の作品に共通なことは，物質的に繁栄してきた社会が人間を圧迫し，人間をその犠牲者にするか，社会をそういう繁栄の方向に動かす力にたいして背を向け，反抗させるかであった。これはまさに1950年代の社会が，一見，志向していたようにみえるものとは反対のものを扱っていたわけであり，個人の自我を掻乱していた「豊かな社会」への作家の反抗であったわけである。のちに Norman Mailer が "The White Negro" (1957) で言うように，なんとかしなければ個人の自我が圧殺されてしまいそうだという危機感のあらわれであり，これがすでに1950年代当初からの小説に描かれていたのである。

II

Saul Bellow は，物質的繁栄の中で，「豊かな社会」を作りだす原動力であり，繁栄そのものであるはずの都市の姿をこんなように描写している：

> On Broadway it was still bright afternoon and the gassy air was almost motionless under the leaden spokes of sunlight, . . . And the great, great crowd, the inexaustible current of millions of every race and kind pouring out, pressing round, of every age, of every genius, possessors of every human secret, antique and future, in every face the refinement of one particular motive or essence—*I labor, I spend, I strive, I design, I love, I cling, I uphold, I give way, I envy, I long, I scorn, I die, I hide, I want*. Faster, much faster than any man could make the tally. The sidewalks were wider than any causeway ; the street itself was immense, and it quaked and gleamed and it seemed to Wilhelm to throb at the last limit of endurance. And although the sunlight appeared like a broad tissue, its actual weight made him feel like a drunkard.
>
> (ブロードウェイはまだ明るい午後で，かすんだ空気がにぶい日光の矢の下でどんよりと漂い，…そして大きな膨大な群衆，各種各様で，ありとあらゆる人種の何百万という尽きることのない人の流れが流れ出て，ひしめきあっていた。各人各様の年齢と特徴，一人一人が大昔から未来にわたる人間のさまざまな秘密を持ち，どの顔にもある特定の動機や本質を示す純粋なものが表われている——わたしは働く，わたしは費やす，わたしは努力する，わたしは計画する，わたしは愛する，わたしは執着する。わたしは死ぬ，わたしは隠れる，わたしは望む——と。人の流れはすみやかに，あまりにもすみやかに動いていて，人数を数えることはだれにもできない。その歩道はどんな人道よりも広く，街路そのものが広大で，震動し輝きを放ち，ウイルヘルムの目にはもうこれ以上もちこたえられないと思えるほどの激しい動悸を打っている。日光は幅広い薄絹のように見えるけれども，実際の重みを受けると彼は酔っぱらいのように目がくらくらした。)[3]

これは44才の主人公 Wilhelm の目に映った1955年の初夏の New York 市である。金，愛情に破綻をきたした Wilhelm にとって，New York 市は耐えがたいほど「複雑に機械化された，煉瓦と配管，電線と石材，穴蔵と高層の入りまじったこの世の果て」("the end of the world, with its complexity and machinery, bricks and tubes, wires and stones, holes and heights")[4] であった。

Ralph Ellison の *Invisible Man* (1952) の「私」が紹介状を持ってやってきた New York 市も同じような様相を呈していた：

The Dharma Bums (1958) ; etc.)

f) Absurdity とか New Nihilism の観点からのもの (1950年代から登場してきた John Barth, J. L. Donleavy, John Updike, Philip Roth などの作品)

3) Sanl Bellow, *Seize the Day* (1956), New York, The Viking Press, 1961, p. 115. (大浦暁生訳，新潮文庫，昭和46年，pp. 183–4.)

4) *Ibid.*, p. 83.

Along the walk the buildings rose, uniform and close together. It was day's end now and on top of every building the flags were fluttering and diving down, collapsing. And I felt that I would fall, had fallen, moved now as against a current sweeping swiftly against me. Out of the grounds and up the street I found the bridge by which I'd come, but the stairs leading back to the car that crossed the top were too dizzily steep to climb, swim or fly, and I found a subway instead.

Things whirled too fast around me. My mind went alternately bright and blank in slow rolling waves. We, he, him—my mind and I—were no longer getting around in the same circles. Nor my body either. Across the aisle a young platinum blonde nibbled at a red Delicions apple as station lights rippled past behind her. The train plunged. I dropped through the roar, giddy and vacuum-minded, sucked under and out into late afternoon Harlem.

(歩道に沿っていくつものビルディングが，一様な形をし，ぴったりくっつき合って，そびえていた。今は一日の終る頃であり，どのビルディングの屋上でも，旗が，ひらひらしながら，舞い降り，崩折れていった。そして僕自身も，倒れそうな気がし，もう倒れてしまっているような気がしながら，僕のほうへ速い勢いで押し寄せてくる流れに逆らって，動いていった。構内を出て，通りを上って行くと，来る時に渡った橋が見つかったが，頂きを横ぎっている電車に通じる階段はあまりにもけわしくて，登れも，泳げも，飛べもできなさそうに思えたので，僕は地下鉄のほうを選んだ。

まわりのものが何もかも，あまりにも速い速度でぐるぐるまわった。僕の頭は，ゆったりとうねる波に乗って，はっきりしたり，空白になったりした。われわれ，あの男，あの男に——僕の頭と僕——いずれも今は同じサークル内を動いてはいなかった。僕身体にしても。通路の向う側の淡いブロンドの髪をした若い女が，駅の灯火が背後をさざ波のように過ぎていった時，赤いデリシャス・リンゴをかじっていた。列車は突進した。僕はその轟音の中へ落ちて行き，めまいがし，頭が真空のようになり，吸い込まれそうになりながら，夕方近くのハーレムへ出た。)[5]

これが田舎的な純真さをもって New York 市へ出てきた青年の都会での体験であった。彼は都会という体制は自分を無視するように作られていると感じるが，自分が不服を申し立てたところで，自分はその体制に押しつぶされ虐待されるだけであると考え，体制から離脱する道を選び，ハーレムのある地下室へ身を沈め，みずからを縛る。これはたんに一黒人青年の経験としてだけではなく，過密都市の非人間性がつくり出す虚無感を表わすものである。

これらの作品に描かれている大都市は，精神面での豊さを人々に約束するところではなく，人間を押しつぶすところであり，巨大さの圧力，孤独な群集の無気力さ，暴力の満ちた「うつろな都市」であったわけである。

III

よく言われるように，1950年代の「豊かな社会」での一般中産階級の人々の理想は，豊かな生活をするのに必要な収入を得られる仕事を都会に持ち，そこで得た収入で，生活を享受するために郊外 (Suburbia) に住居を持つことであった。こういう「豊かな社会」の理想を実現させるはずであった都市と郊外の1950年代の生活が作家の目にどのようにうつっているかをみてみたい。

1950年代の都市と郊外の両方の生活を描いた特異な作家に John Cheever (1912—　) がいる。彼はすでに1930年代から短篇小説を発表し

5) Ralph Ellison, *Invisible Man* (1952), New York, Signet Book, 1953, p. 218. (橋本福夫訳『見えない人間』，東京，早川書房，昭和43年，Vol. 1, 283.)

ているが，話題をよんだのは，彼の第2番目の短篇小説集 *The Enormous Radio and Other Stories* (1953) であった。その後，最初の長篇小説 *The Wapshot Chronicle* (1957)，第3短篇小説集 *The Housebreaker of Shady Hill and Other Stories* (1958) を1950年代に出版した。1960年代に入ると，*Some People, Places, and Things That Will Not Appear in My Novel* (1961)，*The Wapshot Scandal* (1964)，*Bullet Park* (1969)，*The World of Apples* (1973)，*Falconer* (1977) などを出し，常に注目をあびている小説家である。1978年10月には，これまでに発表してきた短篇小説の中から，みずからが61篇を選び，700頁にもおよぶ *The Stories of John Cheever* (Knopf) という集大成を出版し，Cheever ファンをわかせている。

まず，大都会がどんな風に Cheever によってとらえられているかをみてみたい。

The Enormous Radio and Other Stories の中に "Clancy in the Tower of Babel" (「バベルの塔のクランシー」) という最初 *New Yorker* の1951年3月24日号に発表された短篇小説がある。主人公の Clancy はアイルランドの田舎から New York 市へやってきてもう20年になる男で，腰骨を痛めてからはイースト・サイドで，ある高層アパートのエレベター係をしている。彼はそのアパートに住んでいる人々は，自分なら一生働いてもとても買えそうにもない服や宝石を身につけている人たちで，すばらしい人たちだと最初は思っていた。しかし，だんだん本性がわかってくると，住民同士のつながりは全くないし，一人一人をみてみると，妻を殴る夫もいれば，孤独な人もいるし，意地悪い人もいる，同性愛の相手に逃げられてガス自殺をしようとする男もいる。Clancy には New York 市はソドムの町のように思えてくる。作品はこのガス自殺をしようとする男とのかかわりあいを主題としているが，Clancy は New York 市の街をこんな風に感じる：

> It was raining soot and ashes. Sodom, he thought, the city undeserving of clemency, the unredeemable place, and raising his eyes to watch the rain and the ashes fall throngh the air, he felt a great despair for his kind. They had lost the warrants for mercy, there was no movement in the city. ... but he felt that he had been contaminated by the stink of gas.[6]

(煤煙と灰が雨にまじって降っていた。ソドムだ，と彼は思った，寛大さを持たない都市であり，救済されない場所であると。そして，雨と空から落ちてくる灰を見ようと目を上に向けていると，彼は親切をうけることはないという絶望のきわみを感じた。人々は神の恵みをうける可能性すらもっていない，この都市には何の動きもない。……彼はガスの悪臭になじんでしまっていると思った。)

希望を失い，孤独におち入り，絶望し，あげくのはては都市の犠牲者に完全になってしまうのは Clancy だけではない。Cheever が描く大都市生活者の多くがそうである。"The Pot of Gold" (「金色のポット」，*New Yorker* 1950年10月14日号初載) の Ralph Whittemore もそういう一人である。元々，彼は New York 市へ富を求めてやって来たのである。彼の野心は中産階級という地位と裕富さを得ることであった。容易に，しかも短期間に富を得ようとして色々な仕事をやってみるが，どれもこれも上手く行かない。最初は自分たち夫婦には寛大に思えた New York 市も，今では様々な彼の計画を失敗に終らせてしまった場所なのである。しかし，幸い，部屋の外の騒音を遮断できるブラインドの発明に成功し，ひと儲けできそうな幸運に恵まれる。ところが，この大都会は「気まぐれな訴訟と常軌を逸した，しかも末梢的な冒険的な仕事」("the capricious bounty of lawsuits, eccentric and peripheral business ventures")[7] しかないところであった。すでに同種のブライ

6) John Cheever, *The Enormous Radio and Other Stories* (1953), New York, Berkley Publishing Corp., 1958, p. 177.

7) *Ibid.*, p. 37.

ンドで特許をとっている人があって，Ralph は法外な特許料を払って，自分の作ったブラインドの販売をはじめるが，売行きは一向によくならず，負債のみが増す。その結果，経済的に破綻し，幻滅感をあじわい，都会の犠牲者になってしまう。Ralph はかっての自分の姿と昔の秩序を求めて夢遊病者のように街をさまよううつろな人間になってしまう。

都会生活者のこういうばらばらに崩壊した状態は，科学技術の発展が拍車をかけることになる。この良い例が，タイトル・ストリーの“The Enormous Radio”(「巨大なラジオ」, *New Yorker* 1947年5月17日号初載) であろう。

これは Jim Westcott という夫と Irene Westcott という妻の物語である。二人は結婚9年目であり，子供も2人恵まれ，収入も同窓会誌の収入欄をみれば平均以上であり，New York 市の Sutton Place に近いアパートの12階に住む，いわゆる典型的な中産階級の夫婦である。そして，いつかは郊外の Westchester に住みたいと思っている。この夫婦の生活の楽しみは，クラシック音楽を聞くことで，よく二人一緒にコンサートへも行く，家にいる時はラジオでクラシック音楽をいつも聞いている。しかし，今まで持っていたラジオはもう修理がきかないほど古くなってしまったので，新しいのを1台買う。

この新しく購入したラジオは，無格好で，非常に大きく，スイッチも沢山ついていて，まるで，部屋全体を占領しているようで，「侵入者」のような感じを与えるものである。音量は部屋中を圧倒するほど大きいが，音質は確かによく，好きなモーツアルトの弦楽五重奏をかけてみると，前のラジオとは較べものにならない。しかし，あまりにも目ざわりなので，ソファーのうしろに置いて，スイッチを入れてみると，エレベーターの騒音が入ってくる，男の話し声も聞えてくる，電話のベルの音もするという不思議なラジオである。早速修理をしてもらうと，今度は，隣室の住人の会話が手にとるように聞えるようになる。聞えてくる会話は，家庭内のいざこざから，夫婦の虚栄心や絶望感，子供を叱る声，等々，様々で，どれもこれも醜悪な生活の断片である。しかし，Westcott 夫婦は音楽よりも，こういう他人の生活の醜悪な面に強い関心を示すようになり，長時間ラジオの盗み聞きをするようになる。このように変化してしまった自分たちに，こんどは不安になり，ラジオをもう一度修理してもらう。雑音はぴったりと聞えなくなったが，ラジオ代の400ドルのことや未払いのドレス代，化粧台代，一向に増えない収入のことなどで，夫婦はおたがいを罵りあうことになる。そうすると，今度は自分たちの会話が隣室のラジオに流れているのではないかという不安に襲われる。ラジオのスイッチを入れると，東京での鉄道事故，Buffalo での病院火事，その日の気温，湿度のニュースが流れてくる。

“The Enormous Radio”はこういうストーリーである。Westcott 夫婦の生活を豊かにするはずであった新しいラジオが都会の不調和，みじめさ，不安を伝える技術の怪物になり，結局は Westcott 夫婦をその犠牲者にしてしまうのである。

Cheever の描く人たちの感じる孤独感，疎外感，不安は，彼らをとりまく都会生活の条件や彼らの価値感に原因している。Cheever にとって都会は，現代生活の混沌とした状況や現代人の混乱した感情を表わすメタファーとして使われている。都会は生活の意義や可能性，それに古くから伝えられている価値を許容しないところであって，人々を変貌させ，不安におとし入れるところであって，都会は *The Wapshot Chronicle* (『ワップショット家の人びと』, 1957) に描かれている New England の小さな港町 St. Botolphs やいくつかの短篇小説に描かれている小さな町とは対照的なところである。St. Botolphs は今では商業港としての役割をなくしてはいるが，昔ながらのものを感じさせるところである：

The green was shaded by a few great elms and loosely enclosed by a square of store fronts. The Cartwright Block, which made

the western wall of the square, had along the front of its second story a row of lancet windows, as delicate and reproachful as the windows of a church. Behind these windows were the offices of the Eastern Star, Dr. Bulstrode the dentist, the telephone company and the insurance agent. The smells of these offices—the smell of dental preparations, floor oil, spittoons and coal gas — mingled in the downstairs hallway like an aroma of the past. In a drilling autumn rain, in a world of much change, the green at St. Botolphs conveyed an impression of unusual permanence.

(緑地は，何本かの楡の巨木の陰にあって，まばらに並んだ商店の四方を囲まれている。広場の西側の壁をなしているカートライト・ブロックは，二階の正面に，教会の窓にも似て優雅ながらきびしさを感じさせる尖頂窓が並んでいる。それらの窓の内側に，イースタン・スター，バルストロード歯科，電話会社と保険代理店のオフィスがある。これらのオフィスのにおい——歯科用の医薬品，床磨きオイル，たんつぼ，石炭ガスなどのにおい——が入り混じって，過去のかおりのように階下の廊下に漂っている。秋の長雨のころ，自然がいろいろな変化を見せる時季には，セント・ボトルフスの緑は，不思議な永続性を感じさせる。)[8]

St. Botolphs は住人が同族意識を持ちつづけている町であるし，個人の生活と共同体の生活とが自然な形で融合していた頃の記憶を呼び起こさせるものを，今でも内包しているところである。人々に空間，伝統，活力といったものを持たせるところであり，何よりもそこは，拡大された一種の家庭のようなところである。今は老朽観光船の船長をしている Wapshot 家の当主 Leander は，今でもクリスマスには年中行事のようにスケートをするし，同族意識を誇りとしている。そして，かって海運業にたずさわっていた頃の日記を喜びと共感をもって読んでいる。二人の息子 Moses と Coverly にも St. Botolphs の自然と季節の移り変りに深い関心を払わせ，生活の神秘さと神聖さを教えようとしている。この二人の息子が St. Botolphs をあとにして，Washington, D. C. に向うとき，二人の乗っている列車からは，町の人たち皆が知りつくしている家々の間を縫って，通り過ぎていく：

... past the table-silver factory they went, past old Mr. Larkin's barn with this legend painted on it : Be Kind To Animals, past the Remsens' fields and the watermans' dump, past the ice pond and hair-tonic works, past Mrs. Trimble's the laundress, past Mr. Brown's who ate a slice of mince pie and drank a glass of milk when the 9 : 18 rattled his windows, past the Howards' and the Townsends' and the grade crossing and the cemetery and the house of the old man who filed saws and whose windows were the last of the village.

(二人が乗った列車は，銀器工場のそばを通り，〈動物を愛護せよ〉という文句が大書してあるラーキン老人の家畜小屋，レムゼン家の畑と海員ホーム，冬にスケートをする池とヘア・トニック工場，洗濯屋のトリンブル氏の家，ハワード家とタウンゼンド家と踏み切りと墓地と，村の最後の窓が見える目立て屋の老人の家のそばを通って走って行った。)[9]

しかし，新しい生活を期待した Washington, D. C. や New York 市は，永遠性とか連続性というものを一切欠くところで，二人にとって

8) John Cheever, *The Wapshot Chronicle* (1957), New York, Harper & Row, Perenial Library, 1973 p. 3. (菊池光訳『ワップショット家の人びと』東京，角川書店，昭和47年，p. 6.)

9) *Ibid.*, pp. 92-3. (*Ibid.*, p. 87.)

しかし，1964年出版の *The Wapshot Scandal* で描かれる St. Botolphs になると，当主 Leander Wapshot 夫妻なきあとのこの町は，失業や破産をくりかえし，大都会さながらの悪夢の町と変貌する。

は周囲の人々は幽霊のような存在に思えた。都会のもつ外的な断層や混乱は，次第に人間の内的破滅を生むことになる。New York 市の地下鉄の中で，Coverly は孤独と混乱を態じ，自分が実体のない，名前すらないものに変わっていくことを感じる。都会は彼には全く関心を払ってくれないところであり，“urban waste land”に思える：

> Everywhere you look you see signs of demolition and creation. The mind of the city seems divided about its purpose and its tastes. They are not only destroying good buildings; they are tearing up good streets; and the noise is so loud that if you should shout for help no one would hear you.
>
> （どこを見ても，破壊と創造が目につく。目的と好みに対する街の頭脳の考え方が二分されているように感じる。街は，立派な道路をむごたらしく掘り返している。その音があまりにも騒々しく，かりに救いを求めても誰にも聞えない。）[10]

しかも，都会は人々を道徳的頽廃とふしだらな行為に導き，自己を見失わせるところであり，肉体的にも精神にも，人間を崩壊させるところなのである。そこでは人間は物にさせられ，ばらばらの部分に分解される。そのため誰もおたがいに他人の名前すら知らない，たんなる物的存在となる。Coverly が New York 市での就職のために受ける精神分析医とのインタビューにも，都会が人間を生きた一人の人間としては扱わずに，「物」としてしか取扱わないことがうかがえる。St. Botolphs では今でも人々は「われとなんじ」の関係を持ちえたが，Washington, D. C. や New York 市では「われとそれ」の関係しかなく，人間的なコミュニケーションは持ちえなかった。

このように見てくると，高度に発達した機械文明や大都会は，Cheever にとっては，人間生活にバランスや秩序を保つことを不可能にさせ，不調和そのものを表わす場所であって，そこでは人間は情緒的にも倫理的にもバランスを依持しえないところであった。大都会は非人間化のメタファーとして使われているのである。したがって，そこでは人間的なつながりは喪失し，「慰め」(comfort) と「適合」(conformity) の時代と呼ばれている時でも，都会はかえって「不快」(*dis*comfort) と「不適合」(*in*conformity) を経験させるところなのである。

では一般中産階級のものが「理想郷」と考え，住むことを切望していた郊外 (suburbia) での生活はどうであったろうか。

Cheever の描くいくつかの郊外の中では，Shady Hill という郊外が，外観的にはもっとも典型的な「理想郷」である。*The Housebreaker of Shady Hill and Other Stories* (1958) に収められている殆んどの短篇小説はこの Shady Hill を舞台にしている。どの短篇小説でも Shady Hill の場所は記されてはいないが，Cheever の住んでいる Ossining を思わせるところで，Hudson 川の東岸にあって，New York 市へは通勤列車で短時間で行けるところである。

Cheever が描く，この典型的な郊外である Shady Hill の生活を見るために，“The Country Husband”（「田舎の夫」，*New Yorker* 1945 年 4 月29日号初載）を例にあげよう。主人公は Francis Weed という New York 市にオフィスをもつ実業家で，住居は Shady Hill にある。彼には料理上手な妻 Julia と 3 人の子供がある。子供をベィビー・シッターにまかせて，毎週何回となく，近所のパーティに出かける典型的な郊外居住者である。

作品は，Francis が出張先の Minneapolis から乗った飛行機が悪天候に遭遇するところから始まる。飛行機は Philadelphia の近くの畑に，緊急胴体着陸をして，乗客は難をまぬがれる。彼もやっと New York 市にたどりついて，そこから毎日乗りなれている通勤列車に乗ると，やっと人心地がつき，乗りあわせた知人の Trace Bearden に，肝を冷やした事態に遭遇したことを話す。しかし，Trace は他人のそんな話には

10) *Ibid.*, p. 108. (*Ibid.* p. 100.)

まったく関心を払わず，新聞を読みつづけている。帰宅して事故のことを家族に話しても，唯一人として耳を傾けようともしない。

知人や家族のものが Francis に示したこの無関心さは，Shady Hill の無関心さ，無感覚さそのものを表わすもので，Shady Hill はその名が表わすように，人々の思考，感情のかげりを表わしている。

招かれたあるパーティで，Francis はカクテルを運んでくるメイドに心が惑かれ，大戦中にフランスで目撃したある事件を思い出す。それは，一人のフラスン女性がドイツ将校と生活をともにしていたということで，街頭で町の人たちから体罰を加えられていたシーンである。公衆の面前で体罰を加えられていたその裸の女性の肉体には，犯しがたい荘厳さがあったし，町の人たちも彼女を公然と罰することで，自分たちの怒りをぶちまけ，おたがいがもっている悲劇的な苦悩を昇華させていた。今その事件を思い起してみると，そこには人間的なコミュニケーションがあったことに心をうたれる。しかし，今パーティに集っている人たちは，目の前にいるメイドにたいして，フランスで見た人たちとは違った目で見ている。心を開いて，おたがいの重荷をわかちあおとするようなところは，このパーティへ来ている人たちにはない，と Francis は思う：

> The people in the Farquarsons' living room seemed united in their tacit claim that there had been no past, no war—that there was no danger or trouble in the world. In the recorded history of human arrangements, this extraordinary meeting would have fallen into place, but the atmosphere of Shady Hill made the memory unseemly and impolite.[11]
>
> (ファークォーソン家の居間に来ている人たちは，過去や戦争なんてなかったんだとか，世の中には危険なことも悩みもないんだと，暗黙に主張して結び合っているようだった。人間のしたいろいろな計画を記録した歴史の中で，この異常な遭遇はちやんとおさまるところにおさまっているのだろう，だから，シェーディ・ヒルの雰囲気があの記憶を不似合いで無作法なものにしたのだ。)

Francis がメイドに手を触れてみたい衝動を抱いても，Shady Hill では許されないのである。住民同士の交渉は表面的には美しいが，苦しみや悩みをわかちあうというようなことはない。そのため Francis は現実世界をはなれて，自分の夢の世界に入り，そこで慰みを得ようとする。彼はベイビィ・シッターに来ているその娘と一緒に船旅をすることやスキーへ行くことを空想する。そして，空想の中でその娘を愛するようになる。この愛こそが，内面生活に欠くことのできない，彼が必要としている，ある種の情熱的な絆なのである。しかし，こういう内面的で，しかも，純粋な絆を，「天国よりも礼儀正しく物事がきちんとしているような」("Things seemed arranged with more propriety even than in the Kingdom of Heaven.")[12] Shady Hill の生活習慣は許さないのである。

Francis は内面的な本当の純粋さを拒否する Shady Hill の生活習慣からのがれたいと思うが，妻 Julia は Shady Hill での生活と社会的地位を守ることに生甲斐を感じている。ある婦人の記念パーティに自分たち夫婦だけが招かれていない原因が，自分の夫がその婦人に率直に言ったことが婦人の怒をかったことにあることを知って，Julia は夫に語る：

> "I've worked hard for the social position we enjoy in this place, and I won't stand by and see you wreck it. You must have understood when yon settled here that you couldn't expect to live like a bear in a cave."
>
> "I've get to express my likes and dislikes."

11) John Cheever, *The Housebreaker of Shady Hill and Other Stories*, New York, Harper and Brothers, 1958, p. 59.

12) *Ibid.*, p. 66.

"You can conceal your dislikes. You don't have to meet everything head-on, like a child. Unless you're anxious to be a social leper. . . ."[13]

(「わたしたちがここで楽しく暮してられる社会的な地位をつかもうと，わたしは一生懸命してきたのよ，あなたがそれをこわすのをじっとして見てたくないわ」

「好きは好き，嫌いは嫌いと言わなきゃならないんだ」

「嫌いでも言わないでおきなさいよ。何もかもを正面から受けとめることはないのよ，子供みたいに。村八分にされたいのなら別だけれど……」)

Fracis は Shady Hill の自分の嫌う生活習慣を妻が持っていることを知って，妻を殴るが，妻を殴っても自分の救いにはならない。Shady Hill の人たちは誰もかれも偽善といかさまに満ちていて，Francis には，心の通いあう友はいない。彼は救いを精神分析医にもとめるが，その医者は苦しみを和わらげてくれるどころか，彼に木工細工をすすめる。

物語はここでアイロニカルに展開し，Francis は新しい木の香に心の慰めを得る。これは Shady Hill が Francis には「生の中の死」(death-in-life) を感じさせるところで，人間的つながりを拒否する場所であることをいっているのである。

Shady Hill という郊外は，この Francis Weed には心の安らぎや豊かな精神生活を可能にするところではなかったし，アイデンティティを維持しようとしてもそれを許さないところであって精神的崩壊を生む場所であった。*The Housebreaker of Shaky Hill and Other Stories* に収められている他の短篇小説でも，Shady Hill は同じような破滅を来たすところであった。たとえば，"The Housebreaker of Shady Hill" の Johnny Hake, "Oh Youth and Beauty!" の Cash Bentley, "The Worm in the Apple" の Larry, そして，"The Trouble of Marcie Flint" の Marcie はやはり崩壊していった。

Cheever は短篇小説でけでなく，1960年代に入ってから書いた長篇小説でも，Shady Hill と同じような資質をもった郊外を作品中に登場させている。*Wapshot Scandal* の Moses Wapshot にとっての Proximire Manor と Coverly Wapshot にとってのミサイル基地 Talifer，また *Bullet Park* の Neilles にとっての Bullet Park がそれで，これらの郊外は Shady Hill と同じように真の内面的な交わりを拒否する場所なのである。

物質面と表面上の生活では，郊外の生活は確かに華やかで，恵まれていて，安定しているようでありながら，人間同士の内面的な交わりを拒絶しているのである。Cheever は郊外を大都会と同様に，「われとなんじ」という人間関係の存在し得ない場所として描いている。

IV

1950年代の繁栄をもっともよく表わしている大都会や郊外の生活をこのようにみたのは，Cheever だけでなく，すでに例をひいた Bellow の Wilhelm や Ellison の「私」の目にも，大都会は「荒地」と映ったのであった。J. D. Salingr の Holden Caulfield のみたフォニーの世界も，John Updike の "Rabbit" がのがれようとしたのも，1950年代の繁栄しているように見えた社会であった。そして，これらの人物たちは，この繁栄の社会では，「慰め」(comfort) と「適合」(conformity) 型の人間ではなく，孤独，不安，醜悪さ，偽善を感じる「不快」(*dis*comfort) と「不適合」(*in*conformity) 型の人間であったわけである。

このように，1950年代の大都会も郊外も，物質的には繁栄を享受できる場所ではあっても，内面的，精神的生活においては，個人の存在を圧殺する脅威と不安に満ちたところで，人間をその社会の犠牲者にしてしまうところであり，都会は「荒地」であり，郊外は「ディストピア」であり，いずれも正に「荒涼たる状況」("bleak

13) *Ibid.*, p. 74.

scene")[14] を呈しているところとして，作家たちの目には映っていたのである。

こういう「荒涼たる状況」を呈する社会で，「正気の自我」をもち，自らのアイデンティティを確立しようとすれば，破滅に至る犠牲者になるか，反逆者になるしかないのである。しかし，犠牲者になるにしろ，反逆者になるにしろ，こういう人間こそ，Mailer う言う抑圧されているものの姿を知る「異常性格者」(psychopath) であったわけで，実存主義者になる資質をもった人間であったわけである。この意味では，1950年代の繁栄するアメリカ社会こそが，アメリカに実存主義者を生んだのであった。(It is on this bleak scene that a phenomenon has appeared: the American existentialist. . . .)[15]

Mailer はさらにこう言っている：

> To be an existentialist, one must be able to feel oneself—one must know one's desires, one's rages, one's anguish, one must be aware of the character of one's frustration and know what would satisfy it. ... To be a real existentialist ... one must be religious, one must have one's sense of the "purpose" . . . .[16]
>
> (実存主義者であるためには，人は自分自身を感じることができなければならない——すなわち，自分の欲望，怒り，苦悩を知らねばならない，自分の抑圧の性格を意識し，何がそれを満してくれるかを知らなければならない，……真の実存主義者になるためには……宗教的でなければならないし，自からの『目的』感覚を持たなければならない……)

しかし，このような「宗教的」で「自からの『目的』感覚」をもった反逆者のパターンを選択できる真の実存的人物が作品に登場するのは，1950年代終りに近くなってからで，Allen Ginsburg や Jack Kerouac などのいわゆる Beat 作家の出現をまたねばならない[17]。

14) Norman Mailer, "The White Negro" (1957) in *Advertisements for Myself*. New York, Putnam's Son's, 1959, p. 312.

15) *Ibid.*, p. 312.

16) *Ibid.*, p. 315.

17) Jack Kerouac の *On the Road* が出版されたのは1957年であり，*The Dharma Bums* はその翌年であった。